筋書き通りの星降る夜は

左右　央

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
筋書き通りの星降る夜は

【Ｎコード】
Ｎ２５５３Ｚ

【作者名】
左右　央

【あらすじ】
成山はあこがれの森下さんに想いを伝えて、夢も恋も地元に置いて、東京へ行く予定だった。そうやって大人になる予定だった。そういう筋書きを描いていた。それが成山が作った最後のシナリオだった。なのに、クリスマスイブイブに行った学科飲みから、そのシナリオが誰かの手で書き換えられていくように、成山を取り巻く人間関係や環境が変化していく。あこがれを抱いていた森下さんの秘密。作家になりたいという夢。けれど、現実は、時間は前にしか進まない。時間に追い越されないように、置いて行かれないように、

成山は大学生活最後の冬を駆け抜ける。そんな青から群青に変わってしまいそうになる最後の青春を描いた、最後の淡い恋と小説のお話。すべてはフィクションです。

筋書き通りの星降る夜は（前書き）

注：やや生々しい台詞や表現があります。エロ方面だけでなく、おそらく作家志望の方の胸にグッサリな台詞が散見されるので、お気をつけください。徐々に更新していきます。

筋書き通りの星降る夜は

成山（なるやま・ナル）……男。語り部。文学部四年生。東京への就職が決まっている。作家志望一年生。

森下あさぎ（もりしたあさぎ）……女。成山のあこがれの人。文学部四年生。

森志多久遠（もりしたくおん）……女。成山のあこがれの女子大生ラノベ作家。売れっ子。

井上（いのうえ）……男。文学部四年生。地元の銀行へ就職が決まっている。女性が好き。

小松崎（こまつざき）……腐女子。文学部四年。院に進学予定。最近限定ガノタから脱却しつつある。

成山はあこがれの森下さんに想いを伝えて、夢も恋も地元に置いて、東京へ行く予定だった。そうやって大人になる予定だった。そういう筋書きを描いていた。それが成山が作った最後のシナリオだった。なのに、クリスマスイブイブに行った学科飲みから、そのシナリオが誰かの手で書き換えられていくように、成山を取り巻く人間関係や環境が変化していく。あこがれを抱いていた森下さんの秘密。作家になりたいという夢。けれど、現実は、時間は前にしか進まない。時間に追い越されないように、置いて行かれないように、成山は大学生活最後の冬を駆け抜ける。そんな青から群青に変わってしまいそうになる最後の青春を描いた、最後の淡い恋と小説のお話。すべてはフィクションです。

小説家志望だなんて白々しい

@@@

小説家志望を開始して一年が経った。

とある曲をなぞらえる。

あの頃のプランなら、今頃マイケル的生活を送っていたはずだ。

大賞受賞。いきなり増刷御礼。年末のこのラノランキング上位に食い込む。僕の作り出したヒロインが等身大パネルになる。各出版社からオファーがかかる。続刊をコンスタントに出し続け、ある程度読者が増えたら、今度は新シリーズを始動する。同時刊行に挑戦する。作家としての幅を、可能性を、世間に示し続ける。

はっはっは、はっはっは。

すばらしい計画だと我ながら思う。

いやいやいや、違うでしょ。なんと浅はかな。滑稽もここまでくれば潔い。きっとマロとかに褒めてつかわされる。行くとこまで行って、それはもう夢ではなく、幻だ。

けれど、僕は、果たしてそういうモノが欲しかったのだろうか。違う。それだけは、言える。だから、前言撤回だ。僕の小説に対する芽吹きは、そこじゃあないから。

僕は、純粋な気持ちで、物語を作りたくていた。これだけは言える。だから苦しかったけど、楽しかった。僕の頭の中で動き回るキャラクターを追いかけていたわけではない。僕は彼や彼女になれた。だから、楽しかった。

それに、小さい頃からの、夢だったから。

布団の中で母親に読んで貰った物語を、今でも僕は覚えている。あの、夢うつつにまどろむ至福の時間。僕はそれを忘れられなかった。だから、他の子にもわけてあげよう！　そんな感じで、文章を書くことを覚えた。

けれど、本腰を入れて始めるのが少し遅かったかもしれないともう一人の僕は深刻な顔をして言う（そんなのはただの後付けの理由だ）。ではいつから決意したのか。

書こうと決意したのは、一人の女性作家との出会いだった。

出会いと言っても、書店で平積みされた彼女の本を何となく手にとって読んでみて、僕は彼女の作品に感銘を受けて、それで……（省略）。よくある典型だ。そんな理由が決定打。

だから――というわけではないけれど、たかが一年足らずやってみてどうこうできるものかと言われるかもしれない。その通りである。

……知ってる？　志望者は数多いる。腐るほどいる。千万無量の作家志望者。それが閃光のように早すぎるほどに腐るくらいに流れては消えていく。まるで帚星のように、その星の数ほどいるんだ。星にさえなれないデブリも含めて。

――頭の上にいる星は、地球に光が届いた頃には死んでいることもあるそうです。それってきっと私たちも一緒で、そうなるのがいちばんいいのかもって思います。だから、永遠に、延々と、私が死んでも不特定多数に読まれ続ける作品を作りたいっていう気持ちで私はこれからもがんばります。なんて、それは私のこれからの努力次第ですけど。最後に謝辞です。こんな私でも見捨てずに最後までアドバイスを送り続けてくれた編集の――

――知らない方が幸せって、あれは本当だと思うよ。吐き出した想いは読者に届いた頃には腐ってる。それは人間的にもね……、何もかも全部骨の髄までどろっどろに全部全部全部！　……ね、埋もれたい？　そういう恐怖、味わいたい？　私はそれでも闘っていたよ。嫌じゃなかったから。私には確固たる私がいたもの――

一年目の結果は予想通り、惨然たるもので、目も当てられなかった。

当たり前だ。

初めての挫折というにはいささか低いハードルかもしれないけど、僕の心がぽっきり折れてしまった。理由は、僕の器の小ささだ。器量とでも言うのか。書きたいものを表現する手持ちの札があまりにもしょぼかった。それは人間性だ。僕という人間性が、物語を紡げない。

それだけ。

持っていなかった。不足分。

才能、才能才能才能――才能。

努力／才能。

隔たりは強固で浸透圧でどうにかなる隔壁ではない、努力と才能の壁。ベルリンの壁の方がまだいい、あれは登れたからね。こっちの壁は背も高いんだ。なのに、夢だけは見てしまう。夢を見るのは星を見上げるよりも簡単だから。その光が消えるか消えないかは僕次第という側面もひっつけて、ね。

夢を与える原因はあとがきだ。読めばわかる。

作家のあとがきを読んで、その気になった志望者はどれほどいるのだろう。

そして、五寸釘とわら人形を探し求めた志望者も……。

だから、あとがきには是非、才能がすべてと、釘をさして置いて欲しかったね。努力したとか、そういうこと書かないで欲しいね。

それだけ、作家の世界は、努力では埋もれる世界だったんだ。

そんな世界で、藁ほどしかない才能を浮き代わりにした僕は、両足にコンクリートブロックをつけられて、石狩湾に投げ捨てられ、気がつけばなぜかマリアナ海溝よりも深いところまで行き着いてし

まっていた。ほぼ無抵抗だった。
それはもう、あがく足は壊死している。細胞を活性化させる酸素は、水底にはない。

僕は飲み会に出かける前に、デリートキーを押し続けた。
一年分の電子媒体を電子の海から削除しているのだ。削除しながらふと思う。改めてワードやら一太郎で作成した物語にもならなかった電子記録のタイトルを見ると、穴があったら入りたい、そう思った。その才能のなさが、尻なんか隠している暇もないくらい赤面うけ合いなのである。
それも、今日で終わりだ。
終わりを迎えるはずだった。

――タイムリミット？　賞味期限なんてとっくに切れてるよ。馬鹿ね、そんなきれい事を真に受けてたなんて、とんでもない少年ハートっていうか、今時ピーターパンでも空飛べるなんて言わないよ。……教えてあげる。どんなに優れた才能でもね、一度開封してしまえば後は腐る方向にしか時間は進んでいかないの。それ、どういう意味かわかるよね。時間が経って水分が抜けきってカチコチに固まった生ものは食べられないまま捨てられるんだよ――

タイムリミットだ。

でも、そのために僕が最後に用意した筋書きは、書き換えられてしまった。
誰が書き換えたというのか。僕か、それとも神様か。
やめてくれ、馬鹿馬鹿しい。
――白々しい。

筋書きその１－１　アウトラインをなぞるだけ

@@@

――とりあえずビール！

から始まった、とりあえずなんとなしに大学生活を送ってきた僕達の最後の宴会は、とりあえず宴もたけなわ、そろそろ最終電車を気にする時刻にさしかかっていた。

今日は年末も年末、けれどまだ年越し気分には浸れない程度に年末なクリスマスイヴイヴ――二十三日である。まだまだ年明けの日の出を想像するのは難しい気分である。

大学の講義はこの時期になると、教授陣はいわゆる『クリスマスプレゼント』と称する休講を知らせる用紙を、ホールにある掲示板一面に張り出していくわけで、僕達も例に漏れず恩恵を受けていた。それはただただ教授らの年末進行スケジュールをパンクさせられないという、教授の教授による教授のためのクリスマスプレゼント（さぼり）なのだけれど、つまり僕達は全休日。講義がないというわけだ。

そんなわけで、偏差値６０そこらのセンターで数教科点数がよいことが条件で、滑り止め程度のつもりで願書を提出しておけば『来てもいいよ』の合格通知が届く程度の大学の文学部にある心理学科の学生である僕達は卒論の準備や学会発表の準備に対する危機感も一時的に薄れ――というかもう、今の状況を見る限り誰も気にしちゃいない（おまえら空のピッチャー投げんな投げんな）――尚且つ、クリスマスという国民的恋人デーに対する斜に構えた態度を病的に発症させるやからもおらず、リア充も暇を持て余した日であることも計算し尽くされ、あらゆる人種が集いやすい仕様になったイヴイヴの宴会は、例年に漏れず大盛況で終えられそうだった。

僕は盛り上がる向こう側のテーブルには参加せず、その光景を眺めていた。
輪の中心に介入するのは苦手だ。
なにより、当事者になることを僕は躊躇ってしまう。
いつでも冷静な客観的視点は崩したくないというのも然り、馬が合わないっていうのが実のところ本音なのかもしれないけど、実際問題、満足の度数が低いのだ。僕は美味い飯に、それから、ぼそぼそ話せる仲間が数名いれば、それだけで満足できる。大人数で騒ぐよりも、少人数でしっぽりと。
大人の気分、である。
大同小異の小異を好む、というか。
三平二満。省エネ設計なのである。
これで、万年憧れていた森下さんが隣に座ってくれていれば……、ただ一緒の空間の一番近いところで少しだけ会話が出来ればそれで……、いやそれは高望みだろう。今は個よりも世間を優先せねばなるまい世の中なのだ、エゴは捨てるべきだ。アムロだって言っている。それはエゴだと。
僕は自分の衝動を司るどこかの臓器にアムロボイス（C．V．古谷徹）で説教を言い聞かせて、ハイボールを飲み干した。森下さんは向こう側の席の端っこに座っていた。温和しい系の清純女子である。口数は少ないし、柔らかい表情を誰にでも許すような人ではない。けれど、時折会話に参加し、彼女が頷くときにふと覗く三日月型に笑む瞳が僕にはちょうどよく、心地よいものだった。
誰も持っていない雰囲気。唯一無二の存在し。彼女だけが持つ、心地よさ。僕は彼女が好きだった。
いつも遠くから眺めていた。同じ講義とわかれば、彼女の座る遙か後方の席を確保して、後頭部を眺めていた。彼女がチキン竜田丼にマヨネーズをかければ、僕もそれに習って、同じ味を噛みしめた。彼女が生協でエネルゲンを大量購入（完売）した日には、僕は自宅近所のスーパーでエネルゲン（あまり売ってない）を探し求めた。

そのくらい好きだった。のと同時に、僕はいわゆるヘタレだった。ストーカー？　いやいや、否定しないし、できないよ。でも、わかるだろう？　このどうしようもない気持ちを消化するために、迷惑にならないところで行動に移す僕の想いを。

もう一度僕は森下さんを中心に全体をぼやっと眺めた。じわじわ滲んでいた視界が、彼女だけにピントが合ってゆく。その肩でバッサリ切られた黒髪は誰にも染まらない気概を感じさせられるし、黒目がちな大きな瞳は宝石のようで、僕の心をかき立てる。あまり飾り立てないシンプルな装いも、素敵だ。

けれど、それも、その想いも、今日で捨てるつもりだ。もう、森下さんのことで、――彼氏はいるのだろうか？　とか、諸々悩まなくて済むのだ。

今日、僕は、彼女に想いを告げる。

僕の描いたシナリオ通りであれば、「僕は就職が東京なんだ。だから、付き合いたいとかじゃなくて、想いを伝えなければちょっと後悔しそうだったから。ごめんね、はは」と言って、逃げる。これでいい。その筋の人からは本気で説教をされそうな筋書きだけれど、僕は今日、全部捨てるのだ。気持ち悪く思われたならば、それさえも本望だ。

恋も、夢も、さよならだ。

大人にならなければいけないから。

理由は単純。就職するから。大人になるってそういうことだ。

僕は、石狩鍋（実際、札幌の居酒屋でこのメニューを食べたのは初めてである。今の季節、道外では何かと話題になることがあるけれど……県民ショウとかでね）の残りカスを箸で器用に取り皿に移して、ドロドロに溶けた人参を咀嚼した。あぁ北海道の匂い。これもこれでしばらくは見納めになるかもしれないと思うと、感慨深いものである。続けて鮭の切り身のカスを野菜の甘みでコクが上乗せされたスープと一緒に流し込んだ。うん、美味い。これでいい。そう思えるはずだ。

すると、隣の空席に誰かが滑り込んできた。
森下さん、ではなく。
ただの酔っ払いに、箸の、口をつける方で突かれた。
汚ぇ。しかし、ああ、来てしまったか、と嫌な予感を伴った心臓音に首筋が痛んだ。
学友の井上だ。ぎょろりとした瞳に細い体つきはまるでオニドリル。まぁそれでも十二分にイケメンの部類にあたるんだろう。そんなオニドリルの得意技である『みだれづき』みたいな感じで僕の脇腹を小突いてきた。ついでにアルコール含有率が致死量に達しているのではなかろうかと思えるほどの酒臭い呼気が左頬に直撃した。
やめろ、酒臭い、死ね。死ね、酒臭い、人間やめちまえ。
ま、こいつがポケ〇ンになっても絶対にモンスターボールは投げない。捕まえて育てやさんに預けでもしたら、きっと知らない隠し子が生まれるに違いないからだ。本当にみだれづきが得意なやつなのだ。日本全国将来大家族候補推薦とかあったら、弟をジャニーズに応募しちゃう奇特な（誤）お姉ちゃんのごとく、ポストか郵便局に足を運ぶかもしれない。……井上の名誉のために弁解しておくけど、いいやつではある。浮気はしたことがないらしいし。ただ、僕が女なら、ピカチュウの十万ボルトの餌食にするだろうけど。弁解、崩壊。
僕の侮蔑の一瞥をひらめいたように視線を上げて回避され、ゆっくりと何かを思い出す仕草の後、伊達男のような大きな瞳を充血させて、何かを訴えるように見つめてくる。理由は……すぐにわかった。
「……オマエはバイト上がりでそのまま就職すんのかと思ってたよ。違うらしいじゃん？いやマジなところさ」
そういうことだ。僕は気がつかれないように、身震いした。
冬なのに、冷房でも入れてんじゃないのか？　寒いじゃないか、僕の心が。
遠くから『ラストオーダーの時間だってー』という、普段よりも

数音高い声をあげる化粧品会社に就職が決まっているキレイ系の女子の声が響く。その声の両脇を固めるように、数多の視線が突き刺さる。注目を浴びるのは嫌だなぁと思っていると、井上は「生ふたつ！」と僕の分まで注文し、もぞもぞと椅子に座り直した。視線から解放され僕はため息をひとつ。

「誘いはあったけど、しないよ。あそこには未来がないからね。第一管理職って言っても――」

「へーへー。言うね言うね、この辛口マグナムドライマウス。バイトとして現場で働く人間はやっぱ見る目が違うっつーわけ？　……で、どこに？」

「……ドライマウスじゃねえ」

「ちなみに、俺はいつでも喉がカラカラだ」

「あごをしゃくるな……不潔だな」

「まぁ、深読みするな青少年」

「してない。手前は性少年っつーか、性犯罪者予備軍のくせに」

「俺は、同意の下でしか行為には及ばんよ。マイポリシーさ」

顔が濃いなぁ。おっさんめ。それはポリシーじゃない。そもそも性行為は同意の下で行うものだろ。お前のポリシーが崩壊した暁には犯罪者のエリートコースが約束されたも同然じゃないか。

「……で、どこに？」

「……」

僕は視線を外して前方を見遣った。対面には誰もいない。カクテルパーティー効果という用語が側頭部辺りに痛み引き連れてひらめいた。誰でも知っているような、心理学用語だ。いや、もう心理学用語でもない。とある芸人御用達のウンチクだ。

最後の四文字をすぼめるように口の中で発音した井上の表情が、途端に眉間に真剣みを増幅させたせいで、思わず視線を引きつけられてしまった。周囲のどんちゃん騒ぎが一瞬にしてモザイクがかかって、ただの遠い喧噪に変わる。井上は言う。

「成山、オマエさ、あんまりそういう話しなかったじゃん。これで

も心配してるってもんだろ。努力する姿は見せないのが心情かもしれないけどさ、結果くらい教えろ。友達（タチ）だろ」
「……ああ……まぁ」
僕は口ごもった。
今度の最後の四文字の裏っ側には説得の二文字がちらちらする語調だった。
ビールが届く。広がった視界の端っこで『井上×成山？　成山×井上？』と言う音声を拾ってしまった。言えば良いってモンじゃあないでしょ、エセ腐女子さん。……確か彼女はそのまま院生になるはずだ。理由は確か、同人活動の延長戦突入！　だったはず……。
井上には罪はないけれど、なんとなく……姿勢を壁に寄せるように正すと、僕はようやく口を開いた。
「東京のアパレル会社。最近決まった」
ビールの泡に口をつけようとすると、井上に背中をたたかれた。
「結局服飾かよ……むくく……あはははは」
ほぅら。笑われた。
だから、お前には言わなかったのだ。素面だったらチョキで顔面ド突いてたっつーの。
「悪いかよ」
辟易しながらも、冷静さを装ってうそぶく。どんな顔をしているかは知らない。
「悪くはない。それがお前の生きる道なのじゃろ……噛んだ……なのだろ」
てへっと舌を出された。憎悪の権化が具現化してしまいそうだ。
「むかつく。酒臭い。むかつく」
「いやいやいやいや」
井上は顔の前で人差し指をメトロノームのように振った。否定できるところはないはずなのに、ちっちっち、とやった。
「服好きなんだろ？　だったらよかったじゃないか。夢の延長戦の突入じゃないか」

僕は激しく心臓が波打ったのがわかった。けれど、一息だけ呼吸を挟んで。
「あいつの受け売り？」
院に進学する（エセ）腐女子さんへ視線を飛ばすと、井上は頷きながら器用にビールを飲み干した。その横顔に今度は僕から質問を浴びせた。はやく離れて欲しかったけど、なんとなくだ、なんとなく。井上の夢の延長戦をなぶってやろうという魂胆だ。
「てか、オマエはどうなんだよ、井上」
「俺か？　俺はな、銀行員。真面目に金を稼ぐよ」
「オマエが言うと汚らわしい真面目さに変わる。オマエのトコでは通帳作らないから」
「個人向けじゃないしなぁ、こっちから願い下げだっぴょん」
ああ、天変地異が起きないか。コイツを爆心地にしていいから。
「あっそ……てか、渋ってたじゃないか、銀行に就職するの。やっぱ営業職なんだろ？　だから趣味に時間を費やせないって、それにその趣味、行くとこまで行けそうだったんだろ？」
「その話は忘れたまえ、成山」
なぜかウインクをされて、硬直する僕。濃いなぁ。濃いよ……。その絞りの効いたシャツの中にはギャランドゥでもあるんじゃないのか。
「俺はもう、ベースには触らん。音楽はやめた。そんなものにしがみついたまま生きていると誰も幸せにはできないからな。まぁ、とある約束してね……」
「なんだよそれ、まるで心に決めた懇意な人がいるみたいじゃないか」
「いつもいるけど、今回は違う」
「テメェはジゴロか」
「ジゴロはヒモだから、俺には当てはまんねぇなー。一流企業入っちゃったし？　どっちかというと、逆にジゴロでもいいけどな」
「知るか」

「知れよ。……教えてやるから」
井上はそこでちらっと、向こう側の席を見た。
僕はその仕草に含んだ意図を上手に察せなかった。
そしてそんな僕を気にも留めず、井上は上気した頬をぐいっと近づけて、耳を貸せと言った。
だから、僕は耳を貸した。
このときは思えなかったけれど、こんな気持ちを一人で抱え込むなら、大勢の前で公言させればよかったかもしれない、でも、そのときの僕にはそんな考えは微塵も浮かばなかったわけで……。
「……」
聞き取れなかった。
否、耳は聞き取っていた。頭が、脳みそが、体が、僕の受け入れることしか出来ない耳以外のすべてが、拒絶を示した。不快な汗が背中を気味悪く冷やした。
「……なんて？」
「いや、恥ずかしいからそうなんべんもいわせんな。絶対に他の人には言うなよ？　だからよ……」
その不快の元凶をもう一度聞き返す。口の中にたまった唾を吐き捨てる寸前に飲み込んで、貸していた左耳のほうの目を必要もなくつむる。馬鹿みたいにつむる。
抵抗にもならない抵抗という武装をして、そして。

「俺、森下と結婚するから」

おい、……誰だ。僕の心臓に槍を突き立てたのは。……さすがに効いた。

……遠くで、一人二人と、火遁・鳳仙花でも吹くんじゃなかろうかという「ごっめーん」スマイルを弾けさせて印を結んだ男子や女子が帰路について行く。数名に手を振られたが、振り返せなかった。それどころじゃなかったから。まるで天地がひっくり返った気分だった。どうやら爆心地になってしまったのは僕の方だった。

隣にはもう、井上はいない。一発ぶん殴ってやろうかとも思ったが、それは筋が違う。井上には、なにも責任はないだろう。僕の女に何するんだなんて怒っても、それはただの変態成分をいちばん絞りした天然発言であり、そもそも、さっさと想いの内を伝えなかった僕がなによりも悪い。どこまでヘタレなんだ、僕は。

――井上は何て言った？　森下さんと結婚するって？

苦い胃液が込み上げてくる。吐けば楽になれるのだろうが、耳から耳へ駆け抜け、脳みそをめちゃくちゃにしていった言葉が、それを許さない。執拗にのど仏を押さえつけるように、言葉が締め付けてくる。体が芯まで痺れてしまったかのようだ。なのに、森下さんのことを考えると、僕の好きだった笑顔が蘇り、そこだけ思考がクリアになる。なのに、自分の嫌な部分がにじみ出て、思考が黒に侵食されていった。

――いつから付き合っていたのだろう？

結婚に行き着くまでには、それなりに逢瀬を重ねるんじゃないのか……？

――あの井上と、森下さんが好き合ってるって？

まったく気がつかなかった。

――いつも森下さんを想っていたのに。

ははは、馬鹿言え、それ以上に彼女のことを大切にしていた野郎がいたんだよ。

――お前は、森下さんの笑顔を知っていると言ったな。本当か？　正面からの笑顔、見たことがあるか？　なぁ、どんな顔するんだろうな。

知らなかった。僕の知っている森下さんの笑顔は、横顔だけだった。

たぶん今、僕は席を立てないまま、突っ伏している。

酔いつぶれたの？　大丈夫？　と殊勝な声かけをしてくれる居残り組もいたが、僕の酔いは完全に覚めてしまっていた。しばらくすると、誰も声をかけてくれなくなった。

これでは、僕は不完全燃焼のまま、終わってしまう。

でも、そうするしかないだろう。

ここで僕がしゃしゃり出ても、僕の好きな森下さんにとっていい思い出にはならない。

ならば、男なら身を引くべきなのか？　でも、どうしてよりによってあの二人が？　お似合いじゃねえよ……どうして僕じゃ駄目なんだ？

否、違うだろう。そう思ったら駄目なんだ。僕は今日、森下さんを忘れるために想いを伝えようと思ったのに……。これじゃあ逆に、想いが募ってしまいそうだ。馬鹿野郎。

筋書きその１―２

どのくらい、時間が経ったのだろう。

皿の割れる音で、僕は顔を上げた。その光景を認識するまで、数秒時間を有した後、僕は我が目を疑った。こんな光景を見れば、まず自分の網膜を疑うほかないだろう。それから視神経を疑って徐々に体の内部へ疑いの眼を巡らせて、最終的に世界を疑う。

世界を疑って正解だった。それに気がつくまでに数秒欲しかったわけだ。

それでも、にわかに信じがたかった。僕の毛穴が一気に開いたような気がした。

なぜなら、森下さんが、皿を投擲していたからだ。

――何故？　幸せの絶頂にいるはずの彼女が、何故？

取り皿、餃子の乗った楕円形の皿、ガスコンロにかかっていた中型鍋、おたま、菜箸、メニュー表、醤油差し、ああ……椅子に手をかけるな……。もう、めちゃくちゃだった。

この居酒屋にある投げられるモノすべてを投げているのではないかと思うほど、すでに床一面陶器やらその他備品の破片で埋め尽くされていた。

森下さんの表情は、髪の毛で隠れてまるで見えない。いや、僕が見たくないだけなのかもしれない。それでも、全く見えなかった。あごのラインに沿ってキレイにカットされた髪の毛が、鋭利な刃物に見えた。

その漆黒の刃の矛先、僕は投げつけている先を見た。

井上がいた。ここに残っていたのは、僕も含めて四人だった。森下さんに井上に、エセ腐女子こと小松崎さんに、僕。井上が両腕でガードしながら壁に背をつけた。

下ろし立てだったであろうシャツには、ラー油や醤油や砂糖や塩

でぐちゃぐちゃのアートが描かれている。セットされた髪の毛は、鍋の残骸でぺったりと威勢をなくしている。
けれど、その表情はものすごい勢いで憤怒しているようだった。
二人は、何かを言い合っている。まるで地獄絵図のようだ。
するとエセ腐女子さんこと小松崎さんが、僕に気がついたのか、駆け寄ってきた。
口を噤めば可愛らしい彼女からは腐成分が完全に抜けきり、今にも泣き出しそうである。
「成山くん！　喧嘩！　喧嘩だよぉ！」
「……見ればわかる。黄門様でも収集つかないだろうね」
「黄門様！？　黄門様いるの！？　どこ！？　呼び出さないと！紋所ーッ！」
「いねえよ！　つーか、そんなにがっつくと思わなかった！　それより、喧嘩は！」
そうこうしている間にもドラグーンシステムを彷彿とさせるような森下さんの一斉射撃は勢いを衰えさせない。むしろ、投げるものがどんどん重厚になっている。
「きゃあっ！」
明後日の方向に飛んできた椅子が、危うく小松崎さんに直撃しそうになり、彼女は体を縮こまらせてこちらを見た。僕の胸の中に飛び込もうとするそぶりを見せて躊躇った小松崎さんになんとなくわからんでもないと思いながらも、僕は立ち上がった。立ち上がるだけの力が湧いた。その源はなにか。なんとなくわかる。その気持ちを伏せて、ちょうど駆けつけてきた店員に声をかける。ついでに小松崎さんを店員と一緒に避難させる。「警察でも救急車でも消防車でもスワットでもＮＡＳＡでもなんでも呼べ！」と指示を出すと、小松崎さんが「エゥーゴを呼ぶ！　クワトロ太尉ーッ！」と叫びながら店の入り口へ走っていった。
そうこうしているうちに、森下さんは投げるものがなくなったらしく、ついにテーブルをひっくり返した。僕はようやく森下さんの

横顔を見た。彼女もまた――いいや、彼女の方が、憎しみに表情をゆがめていた。井上の非なんかじゃない。初めて見る、本能むき出しの表情に僕は気圧された。
森下さんは机を蹴り上げた。鈍い音さえしない、非力でしかない蹴り。
それでも井上は一瞬怯んだようだった。
暴言を吐くには惜しいほどの繊細な声を震わせて、森下さんが叫んだ。
「……アンタねぇ……ケツの穴に頭突っ込んで今までのふしだらな奇行のすべてをその腐りきった五臓六腑に染み渡るように直腸で叫んでやろうか!? あァ!?」
「あーあーあーあー!! 叫べばいいじゃねえか! お前なんかこっちから願い下げだっつの! つーかなんなんだよ、ケツから生まれてきたくせにまたケツの穴ん中戻りてェだなんて、幼児退行現象甚だしいわ! んなガキ興味ねェっつの! この変態が!!」
「はァ!? 胎児だし! 幼児じゃなくて胎児だし! バッカじゃないの!? 変態はどっちよ!! アンタ何個股があるわけ!? ていうか赤ちゃんはケツから生まれねぇよ!! ここだよ、コ・コ!! ココから生まれるの!!」
森下さんが自分のとんでもないところを指さして、歯ぎしりした。
そんな子だったの? という驚きと失念は禁じ得ない。けれど、それ以上に僕は井上に殺意を抱きそうになった。
「わっかんねぇよ! んなタイツ穿いてねえで脱げよ! そんなに教えたければ脱げよ!!」
いや、ちょっと待てよ。さすがにそれは……。ないだろ、井上。
「はいはいはい! 脱げばいいんでしょ、脱げば!! 脱いだら死ねよ! この浮気者!!」
森下さんのキレた理由が明確になる。
オマエ、そんなやつだったのかよ。浮気してたのかよ!! しないって言ってたじゃん。それ、真っ赤な嘘かよ。

「あーはいはい死んでやんよ！　つーか何番手か教えてやろうか？　んー？　聞きたくないならほらさっさと脱げよ！　脱げ脱げ！　俺は全く興奮しないけどな！　一人で保健体育の授業でもしてればいいじゃねえか！」

「ぐぬぬぬぬぬ……！！」

まるで悪びれる様子のない井上に、森下さんが唸りながらもスカートに手をかけた。

ふるふると、その手が震えているのが、ありありと見て取れた。

二人はまるで僕のことが目に入っていない。このままじゃ、森下さんは……。

小松崎さんがいれば、止めてくれたかもしれない。

警察が来れば、いいのか……？

いやいやいや、違う。

ここに僕がいるじゃないか。

何やってんだ僕は、小松崎さんに指示を出したときみたいなノリで、二人を黙らせればそれでいいじゃないか。まるで……昔描いた小説の、主人公みたいな展開だ。ああ、こういう心情なのか。まるでわかっちゃいなかったな。すげぇダサい。だから、誰の心も揺さぶれないんだよ。やめろって一言、言えばいいんだ。

息を吸って、喉を絞り上げた。

「やめろ」

森下さんは息を吐き出して、親指をスカートのウエスト部分に食い込ませた。スカートに指先の体重がかかっている。聞こえないのか……？

「やめろ」

やめろやめろ、そんな森下さんは見たくないんだ。

「やめろ」

僕の右手が、森下さんの手首を掴んでいた。

森下さんが、我に返ったかのように、はっと息を呑んだ。目が合う。僕は初めて正面から彼女の顔を見た。森下さんは、目が充血し

ていた。ナチュラルメイクの目元が、黒ずんでいた。憤怒の表情が消え去った後には、泣く一歩手前のような、悲しい顔があった。
「は、離して」
「ごめ……っ」
蚊の泣くような声をぶつけられて、思わずその人形のような細い手首を離してしまった。
「……ンだよ、成山……。正義の味方か？　オマエも森下の裸見たいんじゃないのか？」
その地を這うような言葉に、僕は、ひどく胸を締め付けられた。井上の、まるで自分の所有物を扱うかのような卑劣な言葉に、僕は、胸を掻きむしりたい衝動に駆られた。
「俺知ってるんだぜ、森下のこと好きだって」
「言うな」
けれど、裸より見たい、森下の姿があったんだ。井上にはわかるか？
「成山……くん？」
「はは、オマエ、一年の頃から、好きだったって知ってんだぜ。だからよう、せっかくオマエに森下の下半身見せてやろうと思ったのに――」
「やめてくれ。望んじゃいない」
誰もそんなこと頼んじゃいないだろう。適当なこと言うなよ。
本当だったら、僕自身の口から、森下さんが好きだってこと、言いたかったんだ。勝手なことしてくれるなよ。森下さんの悲しんだ顔だけは見たくないって言うのに。
「やめろよ、もう。……井上、次の瞬間から僕はオマエと友達をやめる。だから最後に友達として一言だけ言わせてくれ。……このご時世で、内定取り消し喰らうぞ。馬鹿だな」
「けっ。優等生かよ」
井上はその場にへたり込んだ。
顔を上げると、森下さんとまた目が合った。

大きな瞳が揺れた――と思った次の瞬間、森下さんは走り出した。
僕の横を飛び越えた。しなやかにするりと僕の差し出した手をすり抜けて、入り口の方へ。
「ちょっと、森下さん！？」
僕の呼びかけが部屋の四隅に拡散した。
どこへ行こうって言うんだ。
ここにとどまっても、ちゃんと警察に話せば、大丈夫――なのか？
不安感がふくれあがった。
同時に突風を浴びたかのような喧噪が、僕の体を包み込むように支配した。
サイレンの音。けたたましく、遠くから、耳の穴に侵入してくる。
体の奥底から、得体の知れない感情がわき上がってくる、
「成山くん！　……あれ？　森下さんは！？」
「小松崎さん、ごめん、あと任せた」
「ちょ、ちょっと、ちょっとちょっとちょっと！　何ソレ！？　説明して！！」
小松崎さんには申し訳ないが、このまま森下さんを放っておけない。
警察のサイレンは近い、だから、それまでに帰らなければ、なにかとまずいんじゃないのか？
僕はご用になったことがないからわからないけど、店から弁償がどうとか、とにかく色々！
それに、あれだけ、ヒステリーになった森下さんが心配でたまらなかった。
僕は夜闇に消えていった森下さんを追わなければいけないという衝動に突き動かされるように、とりあえず小松崎さんに財布を渡して、「これでどうにかして」と言い残し、外に出た。金で解決しようと瞬時に判断を下した僕の器量のなさにうんざりしながらも、森下さんの後を追う。

不思議と、なんとなく森下さんに会える気がしていた。
それは僕が作家志望だからだ。
小説よりも奇なる世界に生きているのが、僕らだ。
……誰が書いた筋書きだ？
でも、それがどこかの人気小説家なら、引き合わせるのが常道だろ。

僕の好きな作家、森志多久遠の一場面を思い出しながら……。

そういうもんだろ。

漠然と思いながら外に出た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2553z/

筋書き通りの星降る夜は

2011年12月9日01時18分発行